

# ある夕暮

藍澤祐樹

春を嚮<sup>ひさ</sup>いだ少女達にグレイプフルーツを  
食べさせてあげて

錆びつきながらも開閉されるシャッターに  
油<sup>オイル</sup>をたくさん注いであげて

ざわざわとする雑踏に

猫が何やら怒っている

仇為す目つきで狙っている

鰻のにおいのする町の ある夕暮れ

仕事疲れに ぼんやりと立ち竦む

今日も 飯のため

寝ぐらのため

安っぽい衣服のため

だけに罵声を浴び、身を粉にして

笑われ嫌がられ軽蔑され働いた

残りのわずかは安酒とつまみに消える

数えきれない目玉の群れが

浮かんで ジロジロと僕を見る

同じだけの耳が 僕の疲れた足音を聞く

半分の口が 僕を嘲笑する

公園の汚いベンチに腰かける 安酒をとろりとろりと流し込む

今、こうしている間も 白蟻の女王は悩ましくも卵を産む

# 夏の恋

藍澤祐樹

或る暑い夏 或る遠い暑い夏

期末考査の終わりの夜に

時に ひやりとする風吹く埠頭に

腰かけ 一人 麦酒の苦みを味わった

最後の一口の 少し弱まった炭酸が

喉をつたっておりていく時

ネオンで見えない星空に

たった一つの目が はしゃいで まわり

闇を切り裂く 月光の

わずかで かすかな 恋の幻を見た

それから 鈴虫達が 演奏しはじめたのは

長いようで 駆け足だった

あの一夏の 肌の温度や 甘い囁きは

いったい どこへ いっちまったんだろう？

波に聞いても

寄せては返し 寄せては返し…

波打際に萎んだ浮き輪とか…夏の…

ただ 誰かが 何かが 何処かで 確かに

「もう戻らないからこそ、誰にも奪えない」と

# 様々な甘美——一例として

藍澤祐樹

膨大な 富と時間を費やされ

多くの才人によって 齎され

天才音楽達の旋律を 捏ねあげて

巨万の富を 蕩尽し

幾多の涙と咆哮を 葉味にし

できる限りの家畜を 虐殺して

ありとあらゆる 犠牲に 絞り尽されて

注出された 濃縮の

この世のものとは思えぬ液体を

たった 数滴

舐める

子供達や か弱き人々の

悲鳴も 聞こえぬままに

いや

聞きながして